

山脇学園中学校

2025年度 入学試験問題

国語 B

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。解答らんの外に書かれたものは採点の対象としません。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. 字数指定のある問いは、句読点・記号も一字として数えます。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間が豊かさを喜べないのはなぜなのだろうか？ 豊かさについてごく簡単に考察してみよう。

国や社会が豊かになれば、そこに生きる人たちには①余裕がうまれる。その余裕にはすくなくとも二つの意味がある。

一つ目はもちろん金銭的な余裕だ。人は生きていくのに必要な分を超えた量の金銭を手に入れる。稼いだ金銭をすべて生存のために使い切ること  
はなくなるだろう。

もう一つは時間的な余裕である。社会が富んでいくと、人は生きていくための労働にすべての時間を割く必要がなくなる。そして、何もしなくてもよい時間、すなわち暇を得る。

A、続いてこんな風に考えてみよう。富んだ国の人たちはその余裕を何に使ってきたのだろうか？ そして何に使っているのだろうか？

「富むまでは願いつつもかなわなかった自分の好きなことをしている」という答えが返ってきそうである。たしかにそうだ。金銭的・時間的な余裕がない生活というのは、あらゆる活動が生存のために行われる、そういった生活のことだろう。生存に役立つ以外のことはほとんどできない。ならば、余裕のある生活が送れるようになった人たちは、その余裕を使って、それまでは願いつつもかなわなかった何か好きなことをしている、と、そのように考えるのは当然だ。

ならば今度はこんな風に問うてみよう。その②「好きなこと」とは何か？ やりたくてもできなかったことはいったい何だったのか？ いまそれなりに余裕のある国・社会に生きている人たちは、その余裕を使って何をしているのだろうか？

こう問うてみると、これまでのようにはすんなりと答えが出てこなくな

る。もちろん、「好きなこと」なのだから個人差があるだろうが、いったいどれだけの人が自分の「好きなこと」を断定できるだろうか？

土曜日にテレビをつけると、次の日の日曜日に時間的・金銭的余裕をつぎ込んでもらうための娯楽の類を宣伝する番組が放送されている。その番組を見て、番組が勧める場所に行つて、金銭と時間を消費する。さて、そうする人々は、「好きなこと」をしているのか？ それは「願いつつもかなわなかった」ことなのか？

「好きなこと」という表現から、「趣味」という言葉を思いつく人も多いだろう。趣味とは何だろう？ 辞書によれば、趣味はそもそも「どういうものに美しさやおもしろさを感じるかという、その人の感覚のあり方」（強調は引用者）を意味していた『大辞泉』。これが転じて、「個人が楽しみとしている事柄」を指すようになった。

ところがいまでは「趣味」をカタログ化して選ばせ、そのために必要な道具を提供する企業がある。テレビCMでは、子育てを終え、亭主も家にいる、そんな年齢の主婦を演じる女優が、「でも、趣味ってお金がかかるわよね」とつぶやく。すると間髪を容れず、「そんなことはありません！」とナレーションが入る。カタログから「趣味」を選んでもらえれば、必要な道具が安くすぐに手に入ると宣伝する。

さて、カタログからそんな「その人の感覚のあり方」を選ぶとはいったいどういうことなのか？

最近他界した経済学者③ジョン・ガルブレイス [1908-2006] は、二〇世紀半ば、一九五八年に著した『ゆたかな社会』でこんなことを述べている。

現代人は自分が何をしたいのかを自分で意識することができなくなっ  
てしまっている。広告やセールスマンの言葉によって組み立てられてはじ  
めて自分の欲望がはっきりするのだ。自分が欲しいものが何であるのかを

広告屋に教えてもらうというこのような事態は、一九世紀の初めなら思いもよらぬことであつたに違いない。ア

経済は消費者の<sup>注1</sup>需要によって動いているし動くべきであるとする「消費者主権」という考えが長く経済学を支配していたがために、自分の考えは経済学者たちから強い抵抗にあつたとガルブレイスは述べている。つまり、消費者が何かを必要としているという事実（需要）が最初であり、それを生産者が感知してモノを生産する（供給）、これこそが経済の基礎であると考えられていたというわけだ。

ガルブレイスによれば、そんなものは経済学者の思い込みにすぎない。だからこう指摘したのである。高度消費社会——彼の言う「ゆたかな社会」

——においては、供給が需要に先行している。いや、それどころか、供給側が需要を操作している。イ

いまとなつてはガルブレイスの主張はだれの目にも明らかである。消費者のなかで欲望が自由に決定されるなどとはだれも信じてはいない。欲望は生産に依存する。生産は生産によって満たされるべき欲望を作り出す。

ならば、「好きなこと」が、消費者のなかで自由に決定された欲望にもとづいているなどとは到底言えない。私たちの「好きなこと」は、生産者が生産者の都合のよいように、広告やその他手段によって作り出されているかもしれない。もしそうでなかったら、どうして日曜日にやることを土曜日にテレビで教えてもらったりするだろうか？ どうして趣味をカタログから選び出したりするだろうか？ウ

こう言ってもいいだろう。「ゆたかな社会」、すなわち、余裕のある社会においては、たしかにその余裕は余裕を獲得した人々の「好きなこと」のために使われている。B、その「好きなこと」とは、願いつつもかなわなかったことではない。

問題はこうなる。そもそも私たちは、余裕を得た暁にかなえたい何かなどもつていたのか？

すこし視野を広げてみよう。

二〇世紀の<sup>注2</sup>資本主義の特徴の一つは、④文化産業と呼ばれる領域の巨大化にある。二〇世紀の資本主義は新しい経済活動の領域として文化を発見した。

もちろん文化や芸術はそれまでも経済と切り離せないものだった。芸術家だつて霞を食つて生きているわけではないのだから、貴族から依頼を受けて肖像画を描いたり、曲を作つたりしていた。芸術が経済から特別に独立していたということはない。

けれども二〇世紀には、広く文化という領域が大衆に向かつて開かれるとともに、大衆向けの作品を操作的に作り出して大量に消費させ利益を得るという手法が確立された。そうした手法にもとづいて利益をあげる産業を文化産業と呼ぶ。（中略）

資本主義の全面展開によつて、少なくとも先進国の人々は裕福になった。そして暇を得た。だが、暇を得た人々は、その暇をどう使つてよいのか分からない。何が楽しいのか分からない。自分の好きなことが何なのか分からない。エ

そこに資本主義がつけ込む。文化産業が、既成の楽しみ、産業に都合のよい楽しみを人々に提供する。かつては労働者の労働力が搾取されていると盛んに言われた。いまでは、むしろ労働者の暇が搾取されている。高度情報化社会という言葉が死語となるほどに情報化が進み、インターネットが普及した現在、この暇の搾取は資本主義を<sup>注4</sup>牽引する大きな力である。

（一 部 内 容 を 省 略 し ま し た ）

【國分功一郎『暇と退屈の倫理学』】

注1 需要：モノやサービスを欲しいと思うこと。このあとに出てく

る「供給」とは消費者にモノやサービスを提供すること。

注2 資本主義：お金を使って自由に商売ができる仕組み。

注3 搾取：他の人が苦勞して得た成果を、不当にうばい取ること。

注4 牽引：先頭に立って物事をおし進めること。

問一 A・B に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選

ばなさい。(同じ記号を使用しないこと)

ア では イ つまり ウ したがって

エ しかし オ たとえば

問二 線①「余裕」とありますが、それが無い生活とはどのような生活ですか。「く生活。」に続くように本文中から十七字でぬき出し、最初と最後の三字を書きなさい。

問三 線②『好きなこと』とありますが、ここにかぎかつこが用いられている意図として最も適当なものを、次のア～エから選

びなさい。

ア 本文のキーワードである言葉を読者に対して明確に定義するため。

イ 一般的な意味合いとは異なる使い方であることを際立たせるため。

ウ 自分の考えではなく他者の論からの引用であることを示すため。

エ 辞書的な意味合いと対比させ、その言葉の曖昧さを強調するため。

問四 線③「ジョン・ガルブレイス」とありますが、この人物の考

えとして最も適当なものを、次のア～エから選

びなさい。

ア 現代では、消費者のさまざまな欲望は供給者の手によって作り出されている。

イ 供給者が消費者の需要を感じ取り必要なモノを生産することが経済の土台となる。

ウ 消費者の欲望が供給者によって作られている状況は好ましいものとはいえない。

エ 十九世紀初めから、消費者は自分の欲望を供給者から教わることを増えている。

問五 線④「文化産業」とありますが、それはどのようなものですか。三十五字以内で説明しなさい。

問六 次の一文は本文のどの部分に補うのが最も適当ですか。本文中のア

くエから選

びなさい。

\*つまり、生産者が消費者に「あなたが欲しいのはこれなんですよ」と語りかけ、それを買わせるようにしている、と。

問七 線「豊かさ」とありますが、現代の「豊かさ」の問題点を五十字以内で説明しなさい。

問八 本文についての説明として適当でないものを、次のア～エから選

びなさい。

ア 現代社会における豊かさが必ずしも人々の幸福や満足につながるわけではないと論じている。

イ 読者に対して何度も問いかけることによって、段階的に論を進めている。

ウ ガルブレイスの論を紹介し、それと自分の意見を対比させることで説得力を高めている。

エ 複雑な考えや理論について、身近な例を使ってわかりやすく説明している。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

陣野志保（私）は三十五歳で、大手都市開発企業の課長補佐である。「東京セントラルシティ」という超大型都心開発に携わっていたが、人間関係のトラブルで会社に居づらくなり、年末に長期休暇を取って北海道の釧路にやってきた。釧路湿原に「伊藤タンチョウサンクチュアリ」というタンチョウヅルの保護区があることを知り訪れたところ、タンチョウヅルの美しさに心を打たれ、またそこで職員の天羽翔一さんと出会った。その日の宿に到着すると、置いてある小冊子に天羽さんのインタビュー記事が載っていた。

もともと、野鳥には無縁の生活でした。東京の美大で舞台美術を学び、卒業してからは店舗や博物館の展示デザインの会社に勤めました。主にパートの注1ウインドウディスプレイを担当していたんですが……

天羽さんが勤めていたA社は、私もよく知っている商業施設や展示会場の施工デザインの大手だった。天羽さんは、来る日も来る日も新宿や銀座のパートのウインドウに入ってせつせとディスプレイに従事した。あるとき、思わぬ風景を目にする。

ウインドウディスプレイの仕事っていうのは、A夜中に始まって、翌日の開店まえには終了するものなんです。あるとき、新宿の大手デパートで、B思うようにディスプレイが決まらず、C明け方に形ができたんです。いつもやることなんですが、外に出てガラス越しにディスプレイの最終チェックをしていました。そのとき……

ショーウインドウに明るんだ空が映っている。そのさなかを、すうっと横切る鳥の一群。

あつと固唾をのんで振り向き、天羽さんは空を仰いだ。雁の群れだった。見事にV字を描いて、東の空へ吸いこまれるように飛んでいく。小さな影が見えなくなるまで見送ったあと、再びショーウインドウを見た天羽さんは愕然とした。雁の姿が一瞬かすめたウインドウの景色と、夜を徹して自分が作り上げたディスプレイ。まったく違うものに見えたのだ。

① まいったなあ、追いつかないんだ、と思いましたよ。自分が夜通しがんばって、もつときれいに、さらにかっこよく、と作ったのに、渡り鳥が飛ぶ夜明けの空にはどうしたってかなわない。街角を演出するのも楽しかったけど、もっと大きな風景に関わってみたい。そう思って、三十歳になったのをきっかけに仕事を辞め、タンチョウレンジャーに応募したんです。

私の脳裏に、新宿のはるか上空を横切る雁の群れが浮かんだ。

建設中の注2高層ビル「ザ・メイタワー」の真上も、きっと雁は飛んでいたのだろう。けれど私は気づかなかったに違いない。たった数羽の野鳥が都市の風景を変えるだなんて、いままでの私がどうして思えたのだろうか。

この風景を注3凌駕するのは、私が関わっているプロジェクトなんだ。そんなふうに思いこんで、空を見上げることもなかっただろう。

部屋に戻って、裏手の林に面した窓を開けてみた。強烈な寒気が流れこんでくる。十秒と開けていられない。すぐに閉めようとして、手を止めた。

ビロードのような漆黒の夜空に、無数の星々が広がる。冷たい宝石にも似た輝きをみつけて、引っこめかけた身体を、思い切って凍った空気の中

に乗り出す。

ほんとうに、ぱらぱらと降りかかってきそうな星空だ。

そんなふうには私は、その日、もう何度目かの冬空を見上げていた。

翌朝九時。②タンチョウウレンジャー天羽翔一に言われた通りに、私は「伊藤タンチョウサンクチュアリ」へ出かけていった。

前日とはうってかわって見事な晴天だ。一点の曇りもない青空に新雪の大地が映え、朝日を受けてきらめいている。冷たい空気は風景をいつそう清冽なものにしていた。

天羽さんの言った通り、大砲のように大きな望遠レンズを構えた熟年男性のカメラマンが、すでに十人ほど集まっている。なるほど、こうしてみるとカメラを持たずに丸腰で突っ立っているのは私だけだ。

すでにタンチョウがちらほらと雪上に散らばっていたが、九時を少し過ぎた頃から、続々と飛来した。二羽か三羽、大きな群れは五、六羽で、編隊を組んで飛んでくる。空色の画用紙にすーっと切りこみを入れるように、まっすぐ飛んできて、滑らかに着地する。そのつど、カメラのシャッターを切る音がいつせいに鳴り響く。

雪原の隅っこにある小屋から、薄いベージュのダウンジャケットに白い長靴姿の人が出てきた。

天羽さんだ。

手押し車を押している。中にはトウモロコシのようなものが入っている。ざくざくと雪の中へ歩み出ると、撒き始めた。タンチョウたちがいつせいに近寄ってくる。とはいえ、決して天羽さんの周りに群がったりはしない。絶妙な距離を保ちつつ、天羽さんは空中にトウモロコシを放つ。この時間を知っているのだろう、次々にタンチョウが飛来する。それをめがけて、

カメラマンたちがカシヤカシヤとシャッターを切る。

こうして一日一度、タンチョウウレンジャーはこの場所で給餌をする、とゆうべ読んだ小冊子に書いてあった。飼育しているわけではない。冬場は餌の少ないタンチョウに給餌して、生き延びる手助けをしているのだ、と。

タンチョウは戦前の乱獲と戦後の開発による環境の変化で、一時期は生息数が百羽を切り、絶滅寸前まで追いやられたのだそう。それを、いまは「伊藤タンチョウサンクチュアリ」と呼ばれている農地で、その地主だった伊藤良孝さんが給餌を始め、村民たちの手厚い保護で徐々に増え始め、いまは北海道全体で千羽近くまで回復したという。伊藤さんは亡くなるまで給餌を続けたが、いまは日本野鳥の会が遺志を継いで、タンチョウウレンジャーが給餌と観察に尽力しているのだ。

撒き餌を終えて柵の外へ出てきた天羽さんのところへ、私は急いで駆け寄った。途中、また雪に足を取られて前につんのめってしまった。天羽さんは、大丈夫ですか、と、きのうと同じく声をかけて、立ち上がらせてくれた。

「ありがとうございます。いいものを見せていただいて」  
雪を払いながら、私はそう言った。今日は目出し帽を被っていない天羽さんは、子供のような笑顔になった。

「でしょ。僕も初めて見たときは、こりゃあいいものだ、って思いました。だって、ほんものの『千羽鶴』ですから」

確かにそうだ。私は気持ちよく笑った。天羽さんも一緒に笑った。  
「いつからタンチョウウレンジャーになったんですか」

私の質問に、天羽さんはD「そんな顔になった」

「あれ、僕がタンチョウウレンジャーって、きのう教えましたっけ？」

「いえ。きのう泊まった宿に、野鳥の会の会報のようなのがあって。天羽

さんのインタビュー、拝見しました」

とたんに、照れくさそうな笑顔になる。

「そうかあ。じゃあ、東京を逃げ出してきたこともバレちゃったか」

「ええ。夜明けの渡り鳥に負けてしまったことも」

天羽さんは、まいったなあ、と軍手をはめた手で頭を掻<sup>か</sup>いている。私はふうつと息をつくど、

「③私も、似たようなもんです。逃げ出してきちやっただ」

ごく自然に、告白した。

別に、聞いてもらいたいわけじゃない。でも、天羽さんがこの土地にやってきたいきさつを勝手に知ってしまったて、なんだかフェアじゃない気がしたのだ。

逃げ出してきた、と認めたくなかった。

それなのに、他人に告げてしまつて、急に心が軽くなるのを感じた。

(中略)

<sup>注4</sup> 朝九時を少し回つた頃、きのうと同じいでたちの天羽さんが雪原に出てきた。きんと冷えた空氣のなかに、トウモロコシを放つ。タンチョウたちが、ゆつくりと遠巻きに天羽さんを囲み始める。

この風景の中に入つていける人間は、この瞬間、天羽さんただひとり。私は両手をダウンジャケットのポケットに突つこんで、そのまま絵になつてしまいそんな風景を目に焼きつけた。

柵の外へ天羽さんが出てくる。今度はつんのめることなく、私はゆつくりと近づいていった。私の姿を見ると、天羽さんは手を上げて笑顔になつた。(中略)

「東京へはいつ帰るんですか」

そう聞かれて、微<sup>かす</sup>かな戸惑<sup>まど</sup>いが胸のうちに立ち上つてきた。

私、帰るんだろうか。

帰れるんだろうか。

逃げ出してきてしまった場所へ。

「いちおう、週末には帰る予定です」

真つ白なスケジュール帳を頭の中に広げながら、そう答えた。天羽さんはうなずいて、

「<sup>注5</sup> 陣野さんのプロジェクトが完成したら、僕も見にいきます。どんなふうに東京が変わるか、楽しみにしてますんで」

邪氣<sup>じゃ</sup>のないまなざしでそう言つた。私はまた、うなずくことができなかった。

「じゃあ、また遊びにきてください。たまには、こんななんにもない風景もいいもんでしょ。僕は来年いっぱい、ここにいますから」

タンチョウレンジャーの任期は一年、場合によっては二年いることもある、と天羽さんはゆうべ教えてくれた。そのあとどうするか、というところまで話は及<sup>およ</sup>ばなかった。

天羽さんの頭上を飛んでいくタンチョウの群れがあつた。それにつられて、隅々まで晴れ渡つたすがすがしい空を見上げる。青は目にしみて痛いくらいだ。

タンチョウが去つていった方向を視線で追いながら、ふと、言葉が口について出た。

「私、もう職場に戻れないかもしれない」

メガネの奥<sup>おく</sup>のおだやかな目に、驚<sup>おどろ</sup>きの色が浮かんた。その目をみつめながら、私は続けた。

「逃げてきちやっただです。都市とは真逆の、なんにもないところへ行き

たいって。だからもう、戻らないほうがいいのかもしれない」

負けちゃったんですから。

小さく、そう付け加えた。

自分が積み上げてきた経験を捨てて、思い切ってこの土地にやってきた天羽さんがうらやましかった。そんな勇氣は、どうしたって私にはない。

もう職場に戻れないかもしれない、と告白しておきながら、戻りたいという欲求と戻れないという絶望のはざまで、私はもがいていた。

進むことも、戻ることもできない。立ち止まったままではかんとしている自分が、どうしようもなく切なかった。

天羽さんは私の目をみつめ返していたが、少したしなめるような口調で言った。

「弱気だなあ。東京の風景を変えるって、あんなに言ってたじゃないですか」

私は返答に詰まった。心のどこかでは、慰めかアドバイスか、優しい言葉を期待していたのだ。

「一介の会社員が、そんな大それたことできるわけじゃないですよ」

ちよつとむくれて言うのと、

「どんな大それたことでも、誰かがそう考えるところから始まるんじゃないかな」

天羽さんは微笑して言った。

「④ おんなじですよ、このサンクチュアリだって。この世から消えかけた風景を残そうと、立ち上がった個人がいた。それが大きなうねりになったんですから」

そうして、まぶしそうに雪原を振り向いた。

天羽さんの背後で、風景は輝いていた。どうしようもなくまぶしい一瞬

を、私たちは同じリズムで呼吸していた。その単純な事実、私は静かに胸を打たれた。

(二部内容を省略しました)

【原田マハ『さいはての彼女』より「冬空のクレーン」】

注1 ウインドウディスプレイ：商品を表示するための空間を装飾すること。

注2 高層ビル「ザ・メインタワー」：「私」が手掛けている「東京セントラルシティ」の中心になる建物。

注3 凌駕する：他のものを上回る。

注4 朝九時を少し回った頃：前の場面の翌日。

注5 陣野さんのプロジェクト：前日に天羽さんは、「私」が手掛けている都市計画に自分も関わっていたことを話していた。

注6 大それた：とんでもない。思いあがった。

問一 A C に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当な

ものを、次のア～エから選びなさい。

ア A しぼしぼ B まったく C かえって

イ A たまには B すこしも C ようやく

ウ A かならず B けっして C だいたい

エ A だいたい B なかなか C なんとか

問二 —— 線①「まいったなあ、追いつかないんだ、と思いましたよ」

とありますが、「追いつかない」とはどういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問三 ―― 線② 「タンチョウレンジャー」の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 野生のタンチョウヅルが安心して人間に依存できる環境を整えることで、生息数増加につなげている。

イ 生息状況を観察したり冬に餌を与えたりすることで、野生のタンチョウヅルの生存を支えている。

ウ タンチョウヅルの生息地への人間の立ち入りを厳しく制限することとで、乱獲を防ごうとする。

エ 観光客が撮影しやすい施設を整えることで、タンチョウヅルの観光資源としての活用を進めている。

問四 D に当てはまる漢字三字の言葉を、自分で考えて答えなさい。

問五 ―― 線③ 「私も、似たようなもんです。逃げ出してきちやっただ」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 都会で高層ビルを作り上げるよりも、自然の中で人と生き物が共存する環境を作ることに魅力を感じ始めている。

イ 都会で高層ビル建設を投げ出してきたことに心残りを感ずる一方で、野生動物保護の仕事に誘われて悩んでいる。

ウ 都会での勤めを辞めて北海道にきたことを後悔しつつも、未知の場所です新たな人生を歩むことに手ごたえを覚えている。

エ 都会でのわずらわしい会社勤めから解放されたいという思いと、都市開発の事業をやりとげたいという思いとの間で迷っている。

問六 ―― 線④ 「おんなじですよ」について、

(1) どのような点が「おんなじ」ですか。それを表す言葉を「～という点。」に続くように本文中からぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

(2) 何と何が「おんなじ」のですか。その二つをそれぞれ簡潔に説明しなさい。

問七 本文の内容についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 天羽さんと自分とを重ねることで、私は今までと違う人生を送る決意を固めることができた。

イ タンチョウヅルの美や天羽さんの優しい言葉に触れて、私は前向きに未来を捉えられるようになった。

ウ 雪国の美しい自然や天羽さんとの交流を通じて、私は都会では経験できない感動を重ねてきた。

エ タンチョウヅルと人々との関わりを知ることとで、私はこの土地の貴重な自然の豊かさに気づいた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちが日常的に口にしている「肉」は、様々な問題を抱えています。国連食糧農業機関（FAO）の報告によると、人為的に排出されている温室効果ガスの十四パーセントは、実は家畜から発生しています。こうした状況をふまえ、昨年開かれたパリオリンピックでは、選手村で提供する食事の植物性食品の比重を、大幅に増やす取り組みが行われました。つまり、①環境負荷が大きい食品である肉の使用量をへらすとしたのです。しかし、選手の食事制限につながるこの取り組みは、bヒバンの対象となり、複数のメディアで取り上げられました。ア

また、二〇五八年には世界人口が百億人を突破すると言われており、現在の食生活を維持し続けた場合、肉の消費量は増え続けます。イFAOは、二〇五〇年には動物性タンパク質が、世界で約一億トン不足すると予測しています。つまり、食肉は環境悪化をうながす原因となっているだけでなく、今後の世界人口を支える資源として不足しているのです。

そこで現在注目されている食品が昆虫です。日本では昆虫食文化を持つ地域は限定的ですが、世界では約二十億人が常食としています。昆虫は少量の水やエサで飼育でき、そのうえ、cトウ質が少なく、タンパク質などの栄養が多く含まれています。温室効果ガスの排出量が多い牛や豚と比べると環境への影響も限定的で、まさしく理想的な食材と言えるでしょう。

ウ日本国内でも食用コオロギを利用した商品販売する企業などが登場し始めています。しかし、我々が日常的に昆虫食を見かける機会はまだ少なく、②昆虫食が一般化するためには、課題が多いと言わざるをえません。

とはいえ、どれだけ肉の増産を求めたところで、それに無限に対応する余裕は、今の地球にはありません。エ少なくとも、Xはひかえていく必要があるでしょう。

問一 線 a～c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線①「環境負荷が大きい食品である肉」とありますが、なぜ「肉」は「環境負荷が大きい」のですか。二十字以内で説明しなさい。

問三 X に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 弱肉強食 イ 牛飲馬食 ウ 自給自足 エ 我田引水

問四 次の一文は本文のどの部分に補うのが最も適当ですか。本文中の ア～エ から選びなさい。

\*また、無自覚な食肉は、環境破壊をうながす要因にもなります。

問五 本文の内容として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア パリオリンピックでは、環境に配慮し、選手たちの食事に肉が出されなかった。

イ 今後生じ得る世界的な食糧不足により、人々は一切、肉を食べられなくなる。

ウ 昆虫食は国内では広がっていないが、世界では積極的に食べる人々も多い。

エ 昆虫食は十分な量を確保できる代わりに、栄養が偏っている点が課題である。

問六 線②「昆虫食が一般化するためには、課題が多いと言わざるをえません」とありますが、具体的にはどのような課題があると思われますか。その課題を解決する方法もふくめてあなたの考えを述べなさい。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5の——部のカタカナを漢字に直し、その意味を後のア

～クからそれぞれ選びなさい。(同じ記号を使用しないこと)

- 1 テンケイ的な症状に悩まされる。
- 2 会社の仕事にフンコツ碎身した。
- 3 市長は重要なコウムのため、会議を欠席した。
- 4 ヒョウジュン時間に基づいて、調整した。
- 5 先生の言葉にフンキした。

- ア 一般的に広く認められ、行き渡っているさま。
- イ 物事の目安となるもの。
- ウ 力の限り、全力で努力すること。
- エ 物事に自分の意志で、取り組むこと。
- オ ありきたりで、通常であること。
- カ 物事の特徴的な性質を示すもの。
- キ 心がふるいたつこと。
- ク 行政機関などで行われる仕事のこと。

問二 次の1～5の二つの——部の関係と同じ関係になっているものを、後のア～カからそれぞれ選びなさい。(同じ記号を使用しないこと)

- 1 父の作ったお弁当を持ってくるのを忘れてしまった。
- 2 友だちのエミさんは真面目でやさしい。
- 3 会場にたくさんの人の声援が響いた。
- 4 彼女の振る舞いはあたかも女王のようだ。
- 5 先生の解説はいつもわかりやすい。

- ア 「すごいなあ先輩は」と、私はつぶやいた。
- イ 店頭に並べた話題の小説は飛ぶように売れている。
- ウ たくさん練習したのでたぶんうまく行くだらう。
- エ 彼女はとてもやさしい人だ。
- オ 解答用紙にえんぴつかボールペンで記入してください。
- カ 先生、おはようございます。